危機と変革のなかでの新しい大学生協をめざして

――2009 年の年頭に当たり組合員に――

全国大学生活協同組合連合会
会長理事　庄司興吉

皆さん、新年おめでとうございます。会長理事 4 年目の庄司です。

金融危機がいろいろな形で波及し始め、波乱の年明けです。金融危機は 1970 年代以降世界に広がった新自由主義､すなわち市場原理主義とマネタリズムの破綻の結果ですから、今後相当の期間にわたって世界経済を混乱に落とし入れるものと思われます。20 世紀社会主義の失敗を見越してケインズ主義を放棄した資本主義は、その本来のメカニズムが作動すればどうなるかをあらためて示しつつありますので、世界中はもう一度腰をすえてその克服を考えざるをえなくなるでしょう。

他方、昨年のアメリカ大統領選挙では、史上初めてアフリカ系アメリカ人の候補が当選するなど、大きな変化も始まりました。黒人か白人かアジア系かというのはいわゆる属性（アスクリプション）の問題なので、アフリカ系アメリカ人の大統領登場の意味は、新しい政権がこれから何をしていくかという、いわば業績（アチーヴメント）の積み重ねによって決まってきます。

それでも、ヨーロッパの白人が世界に乗り出し始めた大航海時代以来の 500 年、世界システムを実質的に支配してきたのがヨーロッパ出自の白人であったことに照らせば、アフリカ系のアメリカ大統領が誕生したこと自体、このシステムの根幹を揺るがすような画期的な変革の始まりを意味するものです。大統領選挙の過程では女性や高齢者の候補も活躍しましたので、これまでのアスクリプションによる差別を覆す、この属性革命の意義はさらに大きなものといえるでしょう。

日本、韓国、中国から東南アジア、南アジアなどに及ぶ地域にも、この変化はいろいろな形で波及していくはずです。とくに日本では、1960 年代以来、少数民族問題、女性解放運動、環境保護運動、高齢者の権利問題、障害者の自立運動、家庭内暴力問題などがしきりに議論されてきたにもかかわらず、属性革命的な変革の進展は必ずしも思わしい状態とはいえないので、これからあらためて問題になっていかざるをえないでしょう。

こうしたなかで、アジアでも協同組合の意義が見直され、昨年 12 月にハノイで開かれた国際協同組合同盟のアジア太平洋地域総会では「世界経済危機における協同組合の優位性」が強調されました。日本の大学生協を初めとするアジアの大学生協もこの総会に出席し、これまで生協委員会の下位委員会にすぎなかった状態から、他の協同組合委員会と並ぶ独立の委員会への昇格を認められました。

アジア太平洋地域の大学生協委員会の中心となっているのは日本の大学生協です。金融危機が経済危機へと広がるなか、学生総合共済の分離や全国連帯組織の改革など大きな課題を抱えての再出発ですが、大学生協も世界的な変革の一翼を担えるよう頑張っていかなければなりません。あらためて組合員各位の、ビジョンとアクションプランを意識した、協同、協力、自立、参加をお願いするしだいです。

（『情報』2009 年新年の挨拶－０８１２１３）